

研究の概要

小島道裕

1. 研究の目的

本巻は、国立歴史民俗博物館共同研究「洛中洛外図屏風歴博甲本の総合的研究」(二〇〇九年度～二〇一一年度)の成果報告である*。初めに、その目的について述べておきたい。

洛中洛外図屏風歴博甲本(以下「歴博甲本」)は、現存最古の洛中洛外図屏風として著名な、館の代表的資料のひとつである。これまでの洛中洛外図屏風研究は上杉本に偏っていたため、歴博甲本独自の研究は必ずしも盛んでなかったが、二〇〇七年に開催した企画展示「西のみやこ東のみやこ―描かれた中・近世都市―」を契機とした館内の研究から、発注者、作者、制作目的、制作時期などの基本的な成立事情について仮説を提示するに至り、描かれた人物や事物の解釈も進んできた。

洛中洛外図屏風は歴史資料としても大きな価値を持つため、その研究の進展は、美術史のみならず、政治史、社会史など多くの分野に影響をおよぼし、新たな課題を生み出すことになると思われる。そこで、この機会に各分野の研究者の参加を求め、共同研究として研究を進めることで、成果を学界共有のものとすることを目指した。

また、歴博甲本は一部に大きな欠失部分があり、全体的にも画面の破

損・汚損がかなりあるため、本来の画像を復元した複製を制作することが以前から館内で検討され、館外でも欠失部分復元の試みがなされていた。これについても、図像研究の水準が上がり、また今日のデジタル技術を用いることで、蓋然性の高い復元を行う条件が整ってきた。

復元という共通の目標を掲げて図像研究を行うことは、各分野からの研究を、焦点を合わせて進展させる効果が期待でき、また絵画をどのように分析し、どのような手続きで復元していくかという作業自体も、すぐれて研究的な営為である。

そして、成果として制作された復元画像は、展示や教育普及活動の素材として活用することが可能であり、そのための活用方法の研究もまた、これまで当館で行われてきた博物館学的研究を受け継ぐものとして重要である。

このように、本研究は洛中洛外図研究の水準を向上させ、共有化すると共に、復元複製についても研究実績を積み、またその成果を用いて、博物館活動の充実化にも資することを目的とした。

*共同研究と同じ期間、科学研究費「洛中洛外図屏風歴博甲本の総合的研究」(基盤研究B 21320128)を取得することができ、この資金によって復元複製の全体的な制作を行うことができた。

2. 研究会と作業の記録、および研究組織

第1回研究会 二〇〇九年五月一六日(土)

国立歴史民俗博物館第二研修室

研究課題と研究計画について協議

- ① 描かれた内容と背景に関わる課題
- ② 復元と複製制作に関わる課題
- ③ 活用に関わる課題

研究発表・討論

岩永てるみ「歴博甲本欠失部分(右隻第二扇)の再現について」
複製制作の方法について協議

第2回研究会 二〇〇九年九月一〇日(木)

国立歴史民俗博物館第二修復室・第二研修室

「歴博甲本」原本熟覧(色校正作業の監修を兼ねる)

研究発表

鋤柄俊夫「都市空間として見た時の上杉本と歴博甲本の比較」
作業の報告と検討

- ① デジタルデータの作成(スキヤニング、カラーチャート)
- ② 現状複製の作業(色校正の現状)
- ③ 復元複製に向けて

・地色について(金泥の事例)

・顔料分析の方法と必要性(科学分析、分光測定)

・人物データベースの作成(服飾の表記など)

再現画撮影 二〇〇九年二月二一日(金)

東京芸術大学美術館

岩永てるみ氏による「歴博甲本」右隻第二扇再現画の原本欠失部分を撮影。

第3回研究会 二〇一〇年三月四日(木)

国立歴史民俗博物館第二研修室

作業の報告と検討

現状複製の検討

- ① 完成した現状複製屏風の閲覧
 - ② 高解像度データ「画面閲覧版」について
- 復元複製に向けて

① 欠損部分の検討(右隻第二扇下部の再現状況と復元案・その他の欠損部分の補筆方法)

② 地色について(金泥の問題―部分、素材、分析)

③ その他の顔料分析の検討

④ 人物データベースの作成(改善版の現状)

⑤ その他の課題(貼り札の検討など)

研究発表

佐多芳彦「服装関係データベースの基礎作業と諸問題―洛中洛外
図屏風を素材として―」

来年度の計画について協議(復元作業、研究発表、企画展示プロジェクト)

第4回研究会 二〇一〇年六月一〇日(木)

国立歴史民俗博物館第二研修室

作業の報告と検討

復元複製に向けて

- ① 欠損部分の補筆 方法と現状の検討
- ② 人物データベースの作成 改善版の現状
- ③ その他

研究発表

古川元也「描かれた洛中寺院―法華寺院を中心に―」
澤田和人「サントリー本『三十二番職人歌合』の制作年代について―
洛中洛外図屏風を手掛かりにして―」
協議

今後の計画について

復元作業、研究発表、企画展示プロジェクト、など

第5回研究会 二〇一〇年九月一六日(木)

国立歴史民俗博物館第二研修室他

復元作業の報告と検討

- ・ 欠損部分の補筆と疵等の修復 方法と現状の検討
(左隻作業の現況確認)

展示に向けて

- ・ 要項案の検討
 - ・ 展示内容の検討
- 出品資料とテーマ

研究発表

松尾恒一「中世京都の風流―踊りと祭礼―」

協議

・ 今後の計画について

復元作業、研究発表、現地見学、など

第6回研究会 二〇一一年一月一九日(水)～二〇日(木)

同志社大学寒梅館会議室

一月一九日(水)

見学と討議

同志社大学構内遺構(旧相国寺境内)の発掘調査、および、これまでの「花の御所跡」「近衛邸跡(同志社大学新町校舎)」の調査について
(鋤柄俊夫氏案内・報告)

復元作業進捗状況報告。

一月二〇日(木)

上京巡見「柳の御所」跡付近巡見。法華寺院(妙顕寺・本法寺・妙覚寺・妙蓮寺)については、古川元也氏現地解説。

第7回研究会 二〇一一年四月二〇日(水)

国立歴史民俗博物館第二研修室他

【復元作業の報告と検討】

- ・ 欠損部分修復・補筆作業の現況確認
- ・ 彩色復元の検討

【研究発表】

末柄豊「大永四・五年における三条御所の上京移転について」
井原今朝男「室町期における公家の参上作法と邸宅の位置」

第8回研究会 二〇一一年九月一七日(土)～九月一八日(日)

同志社大学ハリス理化学館他

九月一七日(土)

【復元作業の報告と検討】

- ・ 欠損部分修復・補筆作業の現況確認
- ・ 彩色復元の検討

【研究発表】

近藤好和(国立歴史民俗博物館客員)
「歴博甲本『洛中洛外図屏風』にみえる禁裏正月行事」
大塚活美(京都府立総合資料館)

「歴博F本洛中洛外図類型について」

小島 道裕 「新出の洛中洛外図屏風（北海道伊達市開拓記念館蔵）について」

鋤柄 俊夫 「今出川復興の記録―西園寺・足利・近衛・後藤そして島津―」

【現地調査】

上京の関連故地付近を巡見

「花の御所」跡、近衛邸跡、光照院、妙顕寺（「柳の御所」跡）、宝鏡寺（南の御所）

九月一八日（日）

【現地調査】

下京と上京の関連故地を巡見。京都府立文化博物館展示を見学。

平等寺（因幡堂）、大政所跡、悪王寺社跡、六角堂、曇華院跡、御所八幡、二条邸跡

第9回研究会 二〇一二年三月二十六日（月）

国立歴史民俗博物館第二研修室他

【報告・協議】

復元・展示等の事業報告、報告書の内容についての協議

【展示場における検討】

企画展示「洛中洛外図屏風と風俗画」展の現場における資料と解説および活用方法の検討、内覧会参加

研究組織

岩崎 均史 たばこと塩の博物館
岩永てるみ 愛知県立芸術大学美術学部
神庭 信幸 東京国立博物館保存修復課
佐多 芳彦 立正大学文学部

末柄 豊 東京大学史料編纂所

鋤柄 俊夫 同志社大学文化情報学部

古川 元也 神奈川県立歴史博物館

安達 文夫 本館・研究部・教授

井原今朝男 本館・研究部・教授

大久保純一 本館・研究部・教授

小島 道裕 本館・研究部・教授（研究代表）

小瀬戸恵美 本館・研究部・准教授

澤田 和人 本館・研究部・准教授

高橋 一樹 本館・研究部・准教授

玉井 哲雄 本館・研究部・教授

松尾 恒一 本館・研究部・教授

宮田 公佳 本館・研究部・准教授

3. 研究の成果と課題

今回の共同研究で得られた成果の概要について、本報告書の内容にも触れながら、紹介しておきたい。

(1) 復元研究

当初目的とした、「歴博甲本」の制作当初を想定した復元複製については、これをいったん完成させて、実際に屏風の形に表具し、企画展示で公開することができた。

作業としては、スキャナーによる原本からのデジタルデータの取得と、その修正による現状複製の作成、そしてそれをベースとした、画像の復元と色彩の復元であり、いずれの段階においても、検討を重ねる過程で、多くの知見や作成のノウハウを得ることができた。

特に復元に際しては、原本の詳細な観察によって、残された内在的な

情報を読み取ることと、他の洛中洛外図屏風や関連する絵画資料から、比較が可能な対象を探して検討を重ねることで、かなり蓋然性の高い復元を行なうことができた。もとより完全とは言えない一つの案に過ぎないが、制作当初を想定するためのひとつの基準となる案として、意義のあるものと言えよう。

なお、復元複製の制作については、全体的な経緯については本稿の末にまとめ、詳細については、復元に関して特に御協力いただいた、岩永てるみ、阪野智啓両氏の論考を掲載している。

(2) 描かれた画像および社会的背景の研究

描かれた画像については、欠損部分以外についても、多くの参考画像を検討し、また現地の景観や、発掘データによる知見、および文献史料や他の絵画資料から確認できる多くの事物の実態について、さまざまに分野からの報告を得ることで、理解を大きく前進させることができた。

これらは、それぞれの分野において、さらに新たな課題となるものであり、また洛中洛外図屏風の研究においても、相互比較や時系列的な系譜関係を念頭に置いた検討を行なったことから、描かれた事物の問題だけでなく、制作と需要の問題にも踏み込んで考察を行なうことができた。

諸般の事情で本書には収録できていない成果も多いが、例えば、歴博甲本に描かれた幕府（將軍御所）の問題については、末柄豊氏の報告によって、大永五年（一五二五）に管領細川高国が將軍足利義晴のために造った御所を、正しい位置に描いていることが確認され（末柄二〇一一）、屏風の制作年代や発注者の問題が大きく前進した。内裏に描かれた正月儀礼についても、近藤好和氏によって描かれたものの意味が解明され（近藤二〇二二・二〇二三）、幕府と朝廷・公家の関係に関しては、井原今朝男氏によって、訪問の作法などの問題が取り上げられるなど、描かれた事物と実態の関係が掘り下げられた。

さらに細かな生活や風俗の問題については、「歴博甲本」に描かれた人物について、性別、年齢、身分・職業、服装、持ち物などの情報を記述してデータベース化した。このようなそれぞれの項目について、言語化したデータの蓄積を行なったことは、これまでに例のない成果であり、今後の同種の作業にひとつの標準的な例を示したものと言える。また、これによって、人物数自体も、一四二六人とこれまでの説より大幅に増加した。情報化にあたっては、描かれた事物をどのような言葉にするか大きな問題となるが、これについては、大藪海氏が本書で実際の作業に当たった立場から述べている。企画展示でも、乙本との比較などで具体的な指摘を行い、澤田二〇一一など、服飾史についての研究も進んだ。また、民俗学的な視点からは、松尾恒一氏によって、野外での酒宴の場面に、神をもてなす饗宴のイメージが読み取られ、舞から風流踊りという輪踊りへの展開に、中世から近世への変化を見て取ることができる（松尾二〇一二）。

重要な情報の一つである貼札については、筆跡の研究を行っておられる、国文学研究資料館の海野圭介・中村健太郎両氏に検討を依頼した。結果は本書に掲載しているように、書流の観点からは、江戸時代初期とするのが妥当なようだが、一方で、細川家の被官など、同時代の当事者でないという意味がなさそうな対象にも貼られていることや、「様」「殿」などの敬称の用い方が『大館常興日記』に一致するという事実もあり（水藤一九八九）、貼り直しの可能性など、どう考えるかは、なお今後の課題だろう。

社会的な背景との関わりでは、まず屏風の制作事情をめぐって近年議論があったため、これについての仮説を提示していた小島が、論点についてまとめた。本研究による成果もあり、結論的には、大筋では定説化の方向にあると言える。都市の実態との関連では、鋤柄俊夫氏が、発掘調査の事例と合わせた考察によって、上杉本の描写との比較を行っている。また、画中に多く描かれ、歴博甲本の後で「天文法華の乱」が起

こつた法華寺院と教団の問題について、古川元也氏が述べている。

洛中洛外図屏風自体の問題としては、江戸期における存在の意味も考へる必要がある、岩崎均史氏が歴博E本と地誌出版の関係について明らかにした研究(岩崎 二〇一一など)があつたが、多くの類本がある歴博F本について、大塚活美氏にまとめていただいた。大塚氏の論考では、斜線の方向「勝手」による分類を重視する立場から省かれているが、同一工房と考えられる作品としては、企画展示でも紹介した「巨理伊達本」など、さらにいくつかを数えることができ、洛中洛外図屏風の受容を考へる上で興味深い問題である。

【文献】

井原今朝男 二〇一一「公家が室町殿を訪問する作法」『歴博』No.一六四

岩崎均史 二〇一一「歴博E本」と『京童』—洛中洛外図屏風と地誌

出版との関係—『歴博』No.一六四

近藤好和 二〇一二「歴博甲本に描かれた内裏」国立歴史民俗博物館・

国文学研究資料館『都市を描く—京都と江戸—』(展示図録)

同 二〇一三「洛中洛外図屏風」歴博甲本にみえる内裏とその

行事」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一七八集

澤田和人 二〇一一「男性の小袖丈—洛中洛外図屏風にあらわれた風

俗—」『歴博』No.一六四

水藤 真 一九八九「洛中洛外図」の成立と描写の意図」『日本歴史』

四九七号、

同 一九九四「絵画・木札・石造物に中世を読む」吉川弘文館

末柄 豊 二〇一一「大永五年に完成した將軍御所の所在地—洛中洛

外図屏風歴博甲本の研究のために—」『東京大学史料編纂所附属画

像資料解析センター通信』第五四号

松尾恒一 二〇一二「舞踏に見る中世の黄昏、近世の曙光—洛中洛外

図屏風歴博甲本に描かれる舞と踊り—」国立歴史民俗博物館・国文

学研究資料館『都市を描く—京都と江戸—』(展示図録)

(3) 活用についての研究と実践

展示による研究成果および関連資料の公開と、デジタルデータを元にした活用方法の研究は当初から課題としたところであり、これについても実践を行なうことができた。

企画展示は、「人間文化研究機構連携展示都市を描く—京都と江戸—」の第I部「洛中洛外図屏風と風俗画」として、二〇一二年三月二七日(火)～五月六日(日)に、国立歴史民俗博物館において開催し、完成した復元複製を展示したほか、この機会に合わせて、さまざまな活用の試みも行なった。

画像データの活用については、まずタッチパネルによる超拡大自在閲覧装置のデータを更新し、さらに、画面を二分割して、復元複製と現状複製の比較、および「歴博甲本」と「歴博乙本」の同じ場面を比較できるシステムを開発した。これまでの単純な拡大とその解説から、さらに高い機能を持つ仕組みを作ることができたとと言える。これに関しては、安達文夫「超高精細デジタル資料「洛中洛外図屏風」の閲覧特性」が実施の結果についてまとめている。

先述の「歴博甲本人物データベース」については、一般の利用者による使用も考慮してインテrfフェースを工夫し、企画展示およびインターネットによる利用を行った。宮田公佳「画像・文字情報融合手段としての人物データベース構築」がこれについて述べている。

この他、企画展示においては、内容の読み解きパネル、地形図との比較、他の洛中洛外図屏風も交えた複数の絵画から、個別画像の比較によるスライドショーを作成するなど、いくつかの試みを行なった。今後の博物館における実践や、「歴博甲本」に限らない、他の絵画資料の分析に基づく活用、さらにそれらの総合化といった課題にも、道を開くこと

ができたと言えよう。

4. 「洛中洛外図屏風歴博甲本」復元複製制作の経緯

本共同研究の中心的な課題の一つであった、歴博甲本の復元複製制作については、個別論考としても扱われているが、全体的な経緯と実施した作業の内容については、あらかじめここでまとめておくこととしたい。

(1) 方法の選択

資料の複製制作には、現状通りに制作する「現状複製」と、経年変化などを除いて制作当初の状態を想定して制作する「復元複製」の二つの方法がある⁽¹⁾。

そして、「復元複製」の制作には、さらに二つの方法がある。一つは、材料や製作技法自体を当時と同じもので再現しようとするものであり、もう一つは、材料や技法の同一性は取って求めずに、「見た目」での同一性を極力確保しようとするもので、立体的な資料を型取りと樹脂によって作ったり、手描きの絵画を撮影と印刷の技術で作ったりする場合はこれである。

今回の復元複製制作は、技法や材質の解明が目的ではなく、あくまでも画像として、制作当初はどのようなものだったかを考えることがねらいであるため、「見た目」のみの復元と割り切ることにした。特に、近年著しく発達したデジタルデータとインクジェットプリンタによる制作は、撮影画像に基づくため、手描きよりも画像の同一性ははるかに高く、また、手描きが一度しか制作できないのに対して、データは後からの加工が用意で、試行錯誤や修正を簡単に行なうことができる点で適合的であり、この方法を選択することとした。

(2) 手順と経緯

手順は、およそ次のようになる。

- ① 現状についての、十分な情報量を持ったデジタルデータを取得する。
- ② 色校正によって、現状を正確に再現できるデータと、見た目で現状にほぼ等しい現状複製の屏風を制作する。
- ③ 現状複製データを元に、制作当初を想定して、欠失や後補の部分を補い、復元複製画像のデータを制作する。
- ④ 彩色について、部分ごとに退色を補正した色彩に調整し、制作当初に近い復元屏風を制作する。

以下、順を追って、実際に行なった具体的な作業について述べる。

① デジタルデータの取得

デジタル技術による複製制作のためには、当然まず精細なデジタルデータが必要になる。現在行なわれている方法としては、いったんフィルムで撮影したものをスキャナーで読み込んでデジタル化するか、デジタルカメラまたはスキャナーで直接デジタルデータを取得するか、二つの方法がある。

「歴博甲本」の撮影フィルムは、4×5サイズのポジを1扇あたり4枚の分割で撮影されており、研究会発足当時、それをスキャニングしてつないだデジタルデータもすでに作成されて、タッチパネルによる超拡大装置として稼働していた。これを用いる選択肢もあったが、フィルムのスキャンという限界があり、拡大していくとフィルムの粒子が見えること、接続によるズレや歪みがあること、画面ではなく印刷した際に十分な効果が得られるかが不明なこと、といった問題点があり、また、スキャナーによるデジタルデータ化に後述のようなメリットがあると判断されたことから、今回の複製製作用に、新たなデジタルデータを作成することとした。

複製用のデジタルデータとして、高画素のデジタルバッグを用いたカ

メラによる撮影も行なわれていたが、スキャナーを用いたデジタルデータ作成の方がすぐれていると判断した。

屏風全体を撮影できる大型のスキャナーは、2m幅の資料を扱うことができる、ニューリー社製「スキャメラ・ミュージアムⅡ」だけと思われ、これを搬入して、館内で作業を行なった。利点としてあげられるのは、下記の点である。

- ・屏風全体を継ぎ目なくスキャニングすることができる。
- ・六〇〇dpiの高画素でスキャニングできる。印刷に通常用いられるのは三五〇dpi程度でデータであり、十分な性能と言える。

- ・光源自体が撮像素子と共に移動するため、照明にムラがなく、均質性の高い画像を作成できる。

- ・光源と撮像素子に角度を付けることができるため、表面の凹凸や、反射も捉えることができる。

欠点として最も懸念されたのは、資料の上を撮影装置部分が移動するため、危険性が皆無とは言えないことだが、これについては、すでに東京国立博物館などで実績があり、基本的な安全性は確認されていることに加え、さらに事前にニューリー社側と協議を重ね、資料の上には、ワイヤーなどの可動部分をできるだけ少なくすること、メンテナンスの方法と手順を見直して、汚損の可能性を極力なくすること、といった改善を図っていただいた。結果的には、事故や不具合は全く生じていない。

また、資料の近くを光源が通過することは、保存上好ましいことではなく、この点で数年前には他の複製制作で利用を見送った経緯もあるが、今回の光源は通常の蛍光灯程度のものであり、また短時間で移動していくため、資料へのダメージは大きくないと判断した。

実際のスキャニング作業は、二〇〇九年七月二二～二四日に歴博第一調査室で行ない、歴博甲本の他、E本・F本・京都一覽図画など、他の資料についても高精細デジタル画像データを作成し、これ以後の活用に

利用することができた。

② 現状複製の制作

スキャニングによって取得したデータは、そのままプリントしても原本と同じ色になるわけではない。むしろ、その後の調整を前提としたコントラストが低い画像であり、試し刷りを行なって原本と比較し校正する、という作業を繰り返して、初めて原本に近い画像を作ることができた。今回は、全体については三回、最後の色調整に部分的に一回の、計四回、色校正の作業を行なった。

その際、色は光源の違いによって見え方が異なってくるため、この点も考慮に入れる必要がある。今回の制作で用いたインクジェットプリンター（エプソン社製）が使用している「K3インク」は光源依存性を低減したとされているが、それでも見る部屋によってかなり差があり、実際に主に用いる展示室のケース内において、展示中の原本と比較する色校正を行なった。

このようにして復元の元となる現状のデータを制作した。結果的に、現在最も正確な現状複製のプリントができたため、これも簡易な屏風に仕立てて、その後常設展示で使用している。なお、このデータは印刷用のものであり、画面で見るとまた別の色合いになってしまう。結局画面での閲覧用データは、別途調整して制作した。傾向としては、当初は赤や黒が勝った色になりがちで、原本に近づけることが非常に難しく、結局、やや明るめの、しかし画像としては見やすいデータに割り切ることで、画像の研究や紹介という目的に沿ったものとして制作した。「歴博甲本」のような、古色を強く帯びた茶系の絵画は、現在のデジタル画像技術はやや苦手らしいと思われた。

③ 復元複製画像データの制作

「歴博甲本」の復元を行なう際の課題としては、欠失や後世の補筆部分があることと、退色が進んでいることの二点がある。

まず前者の問題、すなわち図像（形）の復元について述べると、最も大きな欠失・後補の部分は、右隻第二扇中下付近であり、ここは、縦三五センチ、横四五センチ程度に紙が大きく破られ、その上に江戸後期頃と思われる稚拙な補筆が施されている²⁾。この他にも、疵や欠失は多く、右隻第二扇の他にも、紙自体が失われている部分や、紙の縁が傷んだ部分、意図的に消されたもの³⁾などがある。

これらの画像自体が欠失してしまった部分については、似た部分を探して、コピー・アンド・ペーストではめ込むか、それが難しければ、新たに絵を描き、それをデジタル化して合成することになる。

まず、右隻第二扇中下の大きな欠失部分については、現状の絵は明らかに後世の稚拙な創作であり、元の絵がどうかを考える参考にはならない。現在残っている部分を参考に、新たに絵を描くしかないわけだが、これについては、岩永てるみ氏が、東京芸術大学博士論文として考証の上で描いた作品があり、これをベースとすることとし、保管されている同大学でデジタル撮影を行なった。これは、現状に合わせて、つまり、欠失部分が現存していると想定して、古色を帯びた状態に作ったものであるため、いったん現状複製データに挿入して、その後、他の部分と同じように、図像と彩色の復元を行なうこととした。

詳細については、本書の岩永氏自身による論述に譲るが、岩永氏の作品は、基本は、「歴博甲本」に描かれたものの分析による、建物と人物の平均的な像であり、祇園会の山鉾については、上杉本などの他の絵画との比較から、船鉾を補ったものである。

本研究では、岩永氏にも参加していただいて、図像復元の妥当性を検討し直した。結果としては、建物や人物については蓋然性があって基本的に妥当であり、歴史的にこの部分にどのようなものがあつたかは考慮

すべきだが、他の洛中洛外図屏風にも顕著な構造物は描かれていないため、建物については、町屋のみを描いたことを肯定できるとされた。しかし、月次祭礼を描く絵としての性格を鑑みると、「五月」相当の扇である右隻第二扇に五月の年中行事が見当たらないのはやや不自然であり、市街地の行事として、印地打ちを入れてはどうかと考え、モデルとしては、歴博甲本に内容が近い「東博模本」を参照して、子供の着物の柄や色を歴博甲本に合わせて、今回協力をお願いした日本画家の阪野智啓氏に新たに描いていただき、周囲も調整して、岩永氏の作品にデータ化して挿入した。

他の欠失部分についても、阪野智啓氏に作画をお願いした。詳しくは阪野氏自身の論述を参照されたいが、子細に見ると、想像以上に欠失部分や後世の補筆が多く、かなりの部分を描いていただくことになった。作画に当たっては、甲本の似た図像や、他の作品の同じような人物等を探し、甲本と違和感のないように描いて、それをスキヤニングして取り込む、という手順で行なっている。

このような手描き補筆以外の、似た部分をデータ上のコピー・アンド・ペーストによって作った例を若干挙げると、三十三間堂については、腰板の部分が白く塗られていたが、これは拡大して見ると線が稚拙で、また下に朱色が見えている。「東博模本」や「上杉本」でも、この部分は朱色であるため、本来は朱色だったと判断された。右隻第一扇上の三十三間堂は、表側から見ると障子があり白く見えるため、これと混同ないし意識的に改変されたものと思われる。これについては、「音羽の滝」の上部にある朱色の柵をコピーし、この場所に合わせて加工して貼り付けた。また、左隻第四扇上の嵯峨釈迦堂は、多宝塔の扉の部分がほぼ完全に欠失していたため、オリジナルが残っている右隻第二扇上「八坂の塔」の扉をコピーして貼り付けた。なお、この過程で、近くにある「子安の塔」の方は、扉の部分に稚拙な後補があることがわかり、

これも同様に直している。

なお、データ上での復元作業は、画素的には、400×400で行なった。原本をスキャニングしたデータの600×600からは落としているが、これは、原本は拡大しても意味があるのに対し、復元複製は、実物大での見た目以外には意味がなく、それ以上の精度は必要ないため、画像編集作業の容易さを考慮して、印刷に十分な画質を得られる程度まで下げたものである。実際の印刷結果では、十分なものが得られており、これでもややオーバースペックであったかもしれない。

④ 彩色の復元

以上のような方法で、色彩は現状のまま画像を復元したデータは、言うなれば、欠失がない状態での経年変化を想定したものであり、実際には過去にも現在にも存在しない絵である。復元複製は、基本的には制作当初の時点想定して行なうものであり、次に、彩色についても、経年変化のない状態に戻さねばならない。

これについては、使用されている絵の具を想定し、その描かれた当初の状態を再現するわけだが、絵の具の想定には、観察および実際の制作における経験から想定することと、科学的な方法によって用いられている原料を想定する方法がある。後者の科学的な方法については、拡大撮影によって表面の状態を見ることが、赤外線撮影によって写り方を調べることが行なったが、それ以上の調査は、結果としては行なうに至らなかった。必ずしも積極的な理由によるものではなく、単に適当な機会を作り得なかったためだが、今回の復元は、素材や技法の再現を行なうことが目的ではなく、画像の復元を行なうことであるため、絵の具の組成等を明らかにすることは必須の課題ではなく、また、元素などの分析によって原料の同定ができたとしても、それが制作当初に実際にどのような色であったかは、結局のところ経験的に考えるしかない。

使われている絵の具は、あえて科学的調査を行なわなくても、それほど選択肢はないため、ほぼ経験的に推定が可能で、今回の復元には、特に支障はなかったと言える。具体的には、緑青、朱、群青などの絵の具が、制作当初であればどのような色であると思われるか、また、他の絵画ではどのように用いられているか、という観点から、さまざまなパランスも考慮して、主として日本画の制作や障屏画の復元実績を持つ岩永・阪野両氏の判断によって原案を作り、研究会で検討する形で進めた。絵の具については、以上のように、方法としては比較的単純な形で進めることができたが、地色については、原本には金泥が用いられているが、ほとんど剥落ないし変色しており、また再現も金はいわずに、インクジェットプリンターによる表現のみにしたため、調整にはかなり苦労することとなった。これについても、現状で金泥が確認できる部分や、他の絵画を参考に、金泥の部分と紙の地色の部分を決め、グラデーションも考えて、描かれた事物がうまく浮かび上がるように、最終的には全体のバランスを考えて協議の上で決定していった。これについても、詳しくは、阪野論文を参照されたい。

なお、以上の画像編集作業は、データを扱うオペレーターの経験や技量による部分も大きい。今回の復元では、南禅寺障屏画の復元などの実績を持つ、ピージーラボ社の丘本孝志氏に担当していただいた。使用した機材はいずれも市販のもので、使用したソフトは、アドビ フォトショップ CS2 (Mac)、プリンターは、エプソン MAXIMART K3 PX-9500 である。用紙については、純粹にデータによる再現を行なうために、用紙自体の色合いや風合いに依存することは避け、最も忠実な印刷が可能という観点から、テスト印刷も行なった結果、プリンター専用紙であるエプソン社プレミアムマット紙を使用している。

註

(1) 複製(レブリカ)の技法と意味については、小島「博物館とレブリカ資料」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第五〇集、一九九三年)参照。ただし、当時はまだデジタルデータに基づく印刷技法が普及していなかったため、それについては触れていない。なお、復元複製が想定する時点は、基本的に資料の制作当初である。どの時点で資料のどの要素(形、色など)がどのような状態だったかを想定するのは困難なため、中途半端な復元は、実際は存在しないものを作ってしまうことになる。全く欠失も退色もない状態を想定することは、考え方としては妥当性がある。

(2) 補筆の絵の下に元の絵がある可能性も指摘され、赤外線撮影を行なったが、はかばかしい反応はなく、やはり紙ごと破られて失われたと考えられる。他の部分でも、赤外線撮影は効果的でなかった。

(3) 屏風の下部にある顔を引っ掻いたものが多く、低年齢の子供の仕業と思われる。子供が手を出せるような場所でかなりの期間使われていたことも推測できる。

なお、各扇の縁の部分は、傷みや表具のし直しによって、当初あったはずの部分がかなり減失しているが、今回は、基本的には現状で残っている部分以上の復元は行なっていない。その意味では今回の複製は制作当初とは言えないのだが、それを補うのは、ほとんど新たな絵を作る作業になるため、別の課題と判断した。

(国立歴史民俗博物館研究部、共同研究研究代表者)